

## 宗教文化遺産としての宗教テキスト

— 地域の宗教テキスト探査研究と

— アーカイヴス創成事業の連携 —

龍谷大学文学部教授・名古屋大学高等研究院客員教授 阿部 泰郎

はじめに

名古屋大学人文学研究科と弘前大学人文社会学部との学術交流協定締結を記念する催しにお話をさせて頂くことができ、光栄です。これは、名古屋大学人文学研究科附属の「人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）」と弘前大学人文社会科学部の「地域未来創生センター」との、それぞれの活動を通じた相互の学術および地域での実践、ひいて課題や成果を共有する取り組みについての協力の、その最初の活動となります。

その直接の契機は、名大CHTセンター長（二〇一九年三月まで）であった阿部が、かねてより研究上の交流があった、地域未来副センター長の渡辺教授による現在進行中の津軽での取り組みを、二〇一八年七月に国文学研究資料館で行われた国際研究集会において「津軽デジタル風土記」に係るシンポジウムでなされた報告を拝聴したことです。私はすぐ、その場でこれを名古屋大学で開催する予定の「日本宗教文献調査学研究会」にもぜひ紹介して欲しいとお願いして、お話しいただきました。この研究会では、渡辺氏の報告の前に、福島県奥会津地域（只見町）における民間・寺社の宗教文献の調査およびアーカイヴス化（これは国立歴史博物館の小池淳一教授のプロジェクトです）に取り組み、こ

れを「書物の郷」として地域との連携による文化遺産の創成を目指す久野俊彦氏の報告も行われ、津軽と会津と、計らずも東北／奥州の北と南の（かつ、海辺と山間と）対照的ながら、共通する宗教テキストの豊かな所産の発見とその地域社会と連携しての保存、アーカイヴス化による記録と活用のケースワークが提示され、こうした取り組みの全国的なネットワーク化を念願する私にとっては、大きな感動と興奮を喚びおこすものとなりました。そこから、お互いの活動を紹介しつつ交流することを通して、何らかの連携協働や相互協力など直接的な関与ができないであろうかと模索するようになりました。その実現の第一歩として、両機関の交流を目的とする、部局間協定締結へと進んだのです。

実際、久野・小池両氏による歴博の奥会津宗教文献調査は、CHTにおいて私が代表者をつとめていた（S）科研（「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究」二〇一四〜一八）により、二〇一六年から現地見学を始めたとして、調査に協力し、とくに現在では只見町黒谷の瀧泉寺聖教の整理・目録化に共同で取り組んでおります。こうした経緯の元に、今回弘前大学からお招きをいただいて、講演という機会にお話ししようとするのは、この弘前（津軽）、福島（会津）そして愛知名古屋という、それぞれ日本の各地での取り組みが、どうして私のなかでつながり、結びつけられるか、ということでした。また、中央の官公庁・大学・図書館・博物館など研究機関や文化財、文献、そして研究者、あらゆるものが集中している東京と、歴史的に大寺院を中心に歴大な宗教文献・古文書資料が集積されている畿内・京都奈良に対してみれば、まさにローカルなそれぞれ地方に過ぎない地域が、実は驚くべき豊かな史資料を蔵し伝えており、それらを、たんに一部の専門研究者のみで占有独占するのでなく、関わりあう全ての人々により協働して取り組むことによって、自ら地域社会全体のかけがえのない「文化遺産」として生まれかわり共有される、素晴らしい可能性を秘めた世界であることを、ここにお集りの皆

様と改めて確かめあう機会としたいと念願したからです。

中部地域の中心的大都市である名古屋ですが、現在の文化状況からみれば、実はローカルな「物づくりの街」に過ぎません。ただ、歴史的には徳川家康が名古屋城を築き、息子の義直を初代の尾張藩主として、そこに書物を中心に文化を集積した江戸時代は、全国的に見ても、空前絶後の先進文化の中心でした。それらの文化遺産は、今も徳川美術館と蓮左文庫を中心に世界有数のアーカイヴスとなって伝わりますが、その真価は、『愛知県史 別編文化財4 典籍』（二〇一五年）の一冊に紹介させていただきました。

なお、今回は講演だけでなく、テーマ・対象とするところの深浦円覚寺伝来の聖教―宗教テキストの成果紹介・展覧も行われますが、私もここで調査の一端を担わせていただき、自分の研究課題のひとつにとって重要な新出資料を確認するができましたので、後半に、その全文翻刻を含む資料紹介を簡単な解題と共に掲載・報告させていただきます。この機会も得て早速に協働の実現による成果をお届けできることは、大いに喜びとするところです。

### 一、全国有数の古典籍と宗教文献の集積拠点―へ知の拠点―

#### としての名古屋

さきほど少し触れましたが、現在はローカルの親玉のように言われております名古屋ですが、実は江戸時代には、御三家の筆頭尾張藩のお膝元で、学問も大いに振興し、実に豊かな文化集積を誇っておりました。

「御文庫」と呼ばれた城内のアーカイヴスには、本好きの家康から学問を重んじた義直に譲り渡された、いわゆる「駿河御譲本」が中核となつて、大量のすぐれた漢籍と和書を伝えております。中でも重要なのは世界にも稀な朝鮮本（金属活字による古典籍の刊本）が大量に含まれており、これだけでも世界的に貴重な文化遺産であつて、とくに韓国の人々

とその真価を共有することが切に望まれます。今後、その共有を通して両国の理解と和解を進めるべき基盤となります。話を宗教テキストの方に転ずれば、家康はまた、この名古屋の地にやはり稀有な贈り物を遺してくれておりました。それも寺院を丸ごと二つもです。ひとつは、稲沢にあった七寺ななつてらの一切経で、この平安末期の中世尾張の僧俗による一切経書写は、（戦災で喪われた本尊阿弥陀如来像と共に）古代日本の仏教文化の中核テキストである一切経の、それも都の院政期国家仏教の中心であつた法勝寺一切経の内容を今に伝える、しかも通行の流布する一切経には無い多くの珍しい経典が含まれており、きわめて高い価値を有することは、愛知県史にも参加いただいた古写経研究の第一者である国際仏教学大学院大学の落合俊典先生が永年の調査を通じて解明されておられるところです。

ここで紹介したいのは、家康が移転させた、もうひとつの寺院、すなわち、大須観音真福寺の経蔵「大須文庫」です。現在は、名古屋でも最も活気があり、賑やかな、若者や海外の人々も多く集う、庶民のかつとレンディな街となっておりますが、本来は七寺と共に、城下南方の寺町を形成し（その南に熱田神宮が位置します）、ここに、もとは中島郡の大須、木曾川と長良川にはさまれた中洲の一角（現在の岐阜羽島駅の南方）にあった真言寺院が移されたのです。もとはこの地の天神社の本地堂である観音堂を基盤に、鎌倉末期、伊勢出身の学僧浄泉上人能信が初代の学頭となつて、真言を中心に諸宗を兼学する談義所として出発しました。能信は、全国から集まった学僧集団のリーダーとして、地元の伊勢・関の慈恩寺の実済から真言の三宝院流を受法、聖教を書写するのを皮切りに、その活動を更に広げ、同じく伊勢では鳥羽の大福寺の寂雲から、その師である安養寺の仏通禪師ちんこくだいえ大慧が聖一国師から伝えられた禅と融合した密教の東密法流を伝授され、その聖教を書写し、またそれを元に談義も行いました。とくに大規模な法流伝授と聖教書写は、遠く

甲斐から武蔵へ赴き、府中の近郊、高幡不動において儀海から真言・東密の三宝院流および頼瑜（鎌倉中期の根来寺の偉大な学僧で、中世真言教学を飛躍的に発展させた新義真言中興の祖）による中性院流の聖教を伝授することによって、更に一段と充実しました。この能信の関東の儀海からの受法と聖教書写は二度にわたって行われ、その受法と書写は、能信の没後も同法の宥恵によって継続され、宥恵は自ら膨大な聖教をその体系ごと、ほぼ一人で書写し、大須真福寺に伝えました（能信は、自身では余り書写を行わず、むしろ能筆のメンバーに書写させ、署名する場が多くなり、宥恵とは対照的です）。こうして、学頭・能化の能信の元で集積された、中世当時の最先端の密教教学の所産は、宥恵によって『聖教目録<sup>真福寺</sup>』という、形成―成立期の真福寺聖教の全体像がカタログ化されて伝えられます。現在の大須文庫にも、この目録に載せられた聖教の大半が伝存し、伊勢から美濃・尾張、そして甲斐から武蔵（ここは下野や奥州にまで渡った聖教が集結していました）、中世に展開・発展した真言教学の所産が、東西交通の要衝の地である大須に再び結集することになった、その内実が、テキストそのものと、そこに記し付けられた伝来を示す識語によって、如実に理解できます。

しかし、この段階までであれば、それはなお一地域の拠点寺院というレベルで終わっていました。真福寺がそれ以上の、中央の大寺院の蔵書に匹敵する水準の多彩で高度な文献を集積するに至ったのは、能信の後継者である二世信瑜の功績です。信瑜は、若年から南都奈良に赴き、興福寺を経て東大寺東南院門跡の聖珍法親王の許に仕え、その補佐を勤めました。その背景には、鎌倉末期から南北朝にかけて、やはり東大寺東南院門主であった聖尋（彼は後醍醐天皇の味方をして元弘の変で配流される憂目に逢った人物です）に仕えた根来寺僧、頼心の存在があり、彼の東大寺における真言僧（東南院は、弘法大師以来、真言宗の「本所」でした）としての活動を示す記録や聖教・目録等が大量に真福寺に伝わっ

ており、その重要性が知られますが、その頼心の出身一族の系累として同じく門跡の「助法印<sup>スレ</sup>」として東南院に入寺したものと思われる。信瑜はその期待によく応え、聖珍から授法するばかりでなく、門跡の許にあった貴重な聖教を書写することを許され、更に東南院経蔵の聖教目録さえ編むことを委ねられました。真福寺に伝わる『東南院御前聖教目録・御経蔵目録』（貞治三年）は、中世国家の顕密大寺院中枢においてどのような仏教諸宗の聖教が伝えられていたかを具体的に示す稀有なカタログです。（残念ながら内典ばかりで外典の俗書等は収められておりません）とりわけその末に「唐本」として宋や高麗から伝来した最新の仏教（天台・華嚴・律・禅・浄土など）の所産が膨大に集積されている様は壮観で、東大寺が当時の東アジア仏教の動向をダイレクトに受容し、発信する一大センターであった消息をしのばせます。

信瑜は、こうした中世の（知）の拠点であった東大寺東南院に学び、かつ働いて（彼は、門主聖珍の特命を受けて、根来寺へ赴き、頼瑜の主要著作である『秘抄問答』の欠本を補ったことが知られます）、ここで聖教のみならず、多数の貴重な典籍や記録を門主から賜わり、真福寺へ持ち帰ったのです。鎌倉中前期、更に平安時代に遡る古写本が真福寺に多く遺るのは、この信瑜による「東南院本」将来の結果です。現在、国宝や重要文化財に指定されている真福寺本、『漢書食貨志』や『将門記』などは全て東南院伝来本です（なお『漢書』はその紙背を利用して『阿弥陀経疏』という仏典が平安時代に写されており、聖教として伝来したものです）。信瑜はまた、古典籍を伝えるだけでなく、自らも弟子達と共に神道関係の書物を多く写しており、その一環として賢瑜による『古事記』つまり最古の古事記写本（国宝）も書写されました。信瑜の署名のある、<sup>わたらい</sup>度会家行の編んだ伊勢神道書『類聚神祇本源』十五帖は、そうした神典書写の中核を成すものですが、それと共に多くの伊勢神道（伊勢外宮の度会神主を中心に鎌倉時代に形成された神道思想）の著作が伝



えられており、これらも信諭が東大寺からもたらしたものと思われる。その中には、伊勢神道を創りあげた中心人物であった鎌倉後期の神官度会行忠の自筆になる『神典』、『大田命訓伝』(伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記)も含まれており、仏教以外に、神道の中心的な著作、それも原典といふべき重要なテキストが含まれていることは、信諭による将来を遡って、東大寺東南院と、その歴代門主の出身した鷹司関白家(近衛家から岐れた鷹司兼平に始まり、鎌倉後期に朝廷で権勢を揮った一門)と行忠との密接な関係から、伝来したものと考えられます。

真福寺に伝来する内外典(仏教とそれ以外の分野の書物)の、卓越した質の高さとその多彩な内容と来歴とは、もはや地域の一学問寺(談義所)の範疇を超えた、中世日本の東アジア世界に開かれた窓ともいえる、国際的な性格をもっていることも、これまで進めて参りました科学研究費(基盤(S)「宗教テキスト遺産」)の共同研究によって明らかになってきました。特にそれは、中世の最先端仏教といふべき禅において、中国(宋)からの最新の禅籍や、入宋して禅を伝えた祖師たちの新発見の著作(たとえば臨済禅の祖、栄西のこれまでに知られていない新出著作が多数発見されました)など、鎌倉時代までの中世前期の禅の様相が、真福寺に伝わる禅籍によって明らかに参りました。この成果は、仏教思想・哲学研究の第一人者である末木文美士教授の監修のもと、『中世禅籍叢刊』(全十二巻、別巻論集)として先年完結しましたが、それは後世の、五山や臨済・曹洞の二宗による宗学の許で規範化された禅とは全く異なる、顕密仏教とくに真言密教と一体化した禅の、総合仏教といふべき姿がうかがいあがって参りました。こうした、中世仏教思想研究の最先端(フロンティア)を開拓するフィールドが、真福寺のアーカイヴスなのです。

## 二、真福寺大須文庫というアーカイヴスの文化遺産としての可能性

真福寺の宗教テキストの、地域を超えたアーカイヴス文化遺産としての価値探求と発見の可能性は、なお尽きることがないだろうと思えます。それこそ万華鏡のように、見る人毎に、またその角度いかんで、そこに秘められた限りない豊かな世界があらわれる、そのようなポテンシャルをこの文庫は蔵しています。そうしたこれからの研究の可能性の、二つの探査の方向について、今日はお話してみたいと思います。

ひとつは、真福寺の大須文庫という歴史的に形成されたアーカイヴスの大きな特質に関することです。さきほどその形成の歴史についてお話ししたところでも触れたのですが、真福寺の蔵書については、更に形成期をへた室町後期に全体の目録が作られ、近世初頭の水害を経て移転する時期、そして尾張藩の許で管理されるようになった近世中期にそれぞれ目録が作られました。画期的だったのは幕末近い文政年間(一八一八〜一八三一)までに、藩の寺社奉行によって詳細な目録が作成されると共に全て整理・点検され、一部は修理も行われました。このように、時代毎に目録が残されていることで、その都度の蔵書の状況や分類配置が知られることはたいへん貴重です。最近では、戦前の昭和十年代に、当時の住職大槻快尊師の依頼により、東京帝国大学国史学講座の黒板勝美博士が全点の悉皆調査による整理を改めて行い、詳細な目録を作られ、それにもとづいて全点に函号と番号が付され、一点毎に渋染紙袋に入れられ、それまで聖教箱に入っていなかった分も文書を含めて全て袋と箱に入れられて登録され、カードボックスが作られました。これにより文庫蔵書の全てが収納・検索可能となり、文政の点検のうえにより正確で確実な保管のシステムが完成したのです。加えて、調査の過程で重要と判断された分は正統二冊の『善本目録』が編まれて刊行され、その概要を奥書識語の情報と共に公開されました。

昨年の永村眞先生のお話で皆様も御存知のように、黒板博士は既に大

正末年から醍醐寺の聖教古文書調査とその目録化および保存の大事業に取り組んでおりましたが、その僅かな余暇を割いて、十年にも満たぬ短期間に概数でも一万五千点を超える大須文庫のアーカイヴス化を成し遂げられたことは、偉業という他はなく、現在でもこの時の整理のシステムに沿ってこれを更に電子データ化し、保管の設備や資材も少しづつ更新しておりますが、その根本は変更する必要のない、すぐれたアーカイヴシステムを作り上げられたといえます。それが成り立ったのはこの文庫の保存に携わった各時代の先人たちの、目録作りに代表される、絶えざる管理の営みが蓄積継承されていたからに他なりません。

そして、国文学研究資料館が先鞭をつけ、名古屋大学人文科学研究科C H Tがそれを引き継いで、現在取り組んでいる平成の（今年から令和に遷りました）新たなアーカイヴス化に伴う調査と整理で明らかにになった、もうひとつの大須文庫の大きな特質は、黒板目録の全百十三合と新十一合のうち相当の部分を占める（およそ百七合以降と新の全体に散在する）、書名が付かない厩大な断簡の山です。正確には「山」ではなく、一紙毎に分けて包まれたり、同じ形態毎にまとめて括られて（このうち多くは文政の整理の時の処理です）いたり、様々ですが、およそ種々雑多な内容の聖教典籍と紙背文書を含む文庫の本が、巻子は糊離れで一紙毎になり、冊子は綴じが失われて、それぞれ虫損や破損で元の装丁を失い、或いは表紙だけとなったたり前後欠となったたり、一丁だけが遊離していたりと、実にありとあらゆる状態で散在しており、さすが黒板博士の整理でもその全てを処理できず、大方は仮の登録で、まとめて括られているものはそれで一点と数えられておりました。この断簡の山を、全てを元の装丁の状態に復原しながら、その内容毎に分類し、解読できる限りの情報を読みとりながらカードに記録し、それを撮影した画像と共にデータベースに収める、そうした作業を、データベースシステムを作りつつ十年以上かけて行っております。全体の原型への復元と仮

仕分け、登録（番号付け）は既に終わっております。但し、全点のデータベース登録はまだ一部分です。

この断簡整理の果てしない作業のお蔭で、真福寺大須文庫の表からは見えない、隠れた、しかし非常に重要なアーカイヴスとしての特質が明らかになって参りました。それはつまり、真福寺聖教および文書が中世全体にわたる宗教テキストの多様性（現代流行の言葉でいえばダイバーシティ）の宝庫である、ということなのです。ここには、中世宗教のあらゆる分野（顕密の諸宗、教相と事相、唱導や音義悉曇、類書や字書および神道や漢籍、記録や史書、祭文など民間信仰まで）と種々の形態（装丁、料紙、書式、筆体、訓点など書誌情報に関すること）の文献が、およそ六百年間にわたる長い時代（平安・鎌倉から南北朝を中心に室町末期まで）にわたって存在します。調査しながら、まるで中世宗教テキストの全ての見本帖（サンプル集）を縦覧するような思いがいたします。逆にいえば、真福寺の断簡類を整理する作業は、中世宗教テキストの全体像を实地に、現物に則して経験的に学ぶことのできる、この上ない贅沢な訓練場である、ということなのです。そうした経験を積みたい方にとって、この作業ほど有効な機会はないと断言できます。

更に驚くべきことは、これら断簡群は、ただ雑多な混沌の集合ではなく、常に未知の宗教テキストを復原・再生する発見の可能性を秘めていることです。つまり、これらは本来それぞれ一点の首尾完結した書物（やその集合体）であったものが分解し散乱して、その状態のまま取りもあえずまとめられているわけですが、これを一丁・一紙つつ形態別に仕分けし、更に識語その他の情報を記録して、そのうえで内容を解読するにつれて、いわゆる「ツレ」、互いに同じ一つの本に帰属するものであることが分かって参ります。ただし、そうした書誌データも（そしてデータベースも）助けになるのですが、究極はこれらを見る人間の記憶の力によって、おおよそ直観的に「ツレ」が判別されます（やはり人

間の経験の眼の力は大了なもので、これは自ずとこうした場に永い間持読して取り組んでいると鍛えられます。そのようにして、これまでに断簡の山の中から、大袈裟に言えば仏教史を書き替えることになるようなテキストが幾つも発見されました。つまり、部分的な復原ではなくて（いまだその段階に留まるものもありますが）、ほぼ完全に首尾が揃ってその全体が把握できる一点の書物となったのです。代表的な例を挙げれば、臨済宗の祖師として日本に禅を伝えた栄西のこれまでに知られていない著作である、それもまだ栄西が生きて活動している時期の写本『改偏教主決／重修教主決』が、断簡から蘇えりました。これは、栄西が二度の入宋を行うあいだ、九州大宰府の周辺で活動していた時期の所産で、彼がまだ宋から禅を伝える前の著作ですが、栄西は台密葉上流の祖として大きな影響を後世に与えており、多面的で精力的な活動をくりひろげた彼の学識の幅広さと共に、論争を厭わず徹底して主張を貫く学僧としての面目が鮮やかにうかびあがります。その成果は、科研による真福寺の調査研究の最新成果を提示した「中世禅籍叢刊」の第一巻『栄西集』（二〇一二年）に、影印・翻刻と解説という形で公刊されましたが、それまでに足かけ十年間をかけて、断簡整理から洗い出した『改偏教主決』ツレの一丁毎に解読を積み重ね、時にその舞台となった九州の現地調査や、中間的な研究会での共同報告、そして福岡市の歴史博物館での特別展「栄西と中世博多」展での展示公開や講演など、さまざまな活動を行いながら、それが秘めた内容に関する理解を深め、学界や社会と共有する活動が、この一点の書物の復原をめぐるくりひろげられたのです。それらを担われた、末木文美士先生（国際日本文化研究センター名誉教授）や米田真理子さん（神戸学院大学）らの息の長い研究活動があつてこそ実を結んだ成果でした。こうした断簡からの復原は、この栄西の一点にとどまらず、「中世禅籍叢刊」の中に収める何点かの重要な禅に関する宗教テキストは、そうして見いだされてきたものです。

それらの成果から、あらためて認識されるあらたな真福寺大須文庫の驚くべき特質とは、もういちど繰り返しますが、こうした断簡の一紙半丁まで含めて、永い伝来の間に僅かでも決して廃棄したり失うことがなかった、という事実です。それゆえに、『改偏教主決』は、じつに見事にバラバラの状態となつて文庫の箱の至るところに散在しましたが、そこからまた全てが集められて元のようにひとつの書物として見事に復原することができたのです。これを私は、文献学上の「奇蹟」と呼んでよいと思つています。

何故、このような「奇蹟」が可能となつたのか、それは、真福寺において、その創建以来（つまり七百年以上の）長い歴史の間、避けられない本の破損や虫損、そして移転の原因となつた木曾川の洪水による水害などがあつても、まとまって廃棄されたり持ち出されたりはせず、分離・散在したままに箱のあいだを移動しながら自ずと伝えられてきたからでしょう。いや、ただ漫然と伝わってきたのでは決してありません。特に江戸時代になつてからのことですが、真福寺大須文庫の管理に任持だけでなく、尾張藩の寺社奉行が関わるようになったことは、大須文庫の聖教の保存にとつても大きな貢献を果たしたと思われまふ。何故なら大須文庫の聖教に他には類本のない貴重な稀覯典籍が多数含まれてゐることが、好学の藩主の許ですぐれた学者がたくさん輩出した尾張藩ならではの情報交流によつて周知のこととなつておりましたので、文庫全体の出納管理には常に周到な配慮を払つていたのでしよう。とくに文政年間には、江戸から幕府の書物方というべき塙保己一が群書類従の続篇を編むために名古屋を訪れ、とりわけ大須文庫から多数の重要文献を選んで採訪・収録いたしました（井上和歌子さんの調査によれば、それは五十点を越えるほどです）。この業績と前後して、尾張藩寺社奉行では新たな目録の編集にとりかかり、同時に重要典籍の修理も行い、とくに一点毎に表紙や首尾に点検印を捺しました。「尾張藩寺社奉行点検之



印」の朱方印は、これこそ大須文庫本というブランドを示すものとなりましたが、同時に庫外への不用意な流出を防ぐ効果も生じました。続いて幕末の嘉永年間には円朱印の点検印で卷子本の紙継ぎ部分などへも捺されて、より周到に真福寺の本は「しるし付け」されたのです。さきにも述べましたが、江戸時代までのこうした厳重な管理と調査考証を伴った保守が持続したからこそ（考証に関していえば、国宝の「最古」の『古事記』の書写年代が明らかになったのも、それらの管理に伴う考証の賜物でありました。それらの事情は名古屋博物館が編みました特別展図録『大須観音 いま開かれる奇跡の文庫』（二〇一二年）に詳しく紹介されております）、近代に黒板博士による悉皆調査と整理があれだけの短期間に出来たのだと思います。

### 三、大須文庫と金沢文庫の二つのローカルなアーカイブスのグローバルな特色

地域（ローカル）の寺院蔵書（聖教）宗教テキストのアーカイブスの好例であり、突出した典型としての真福寺大須文庫の特質を紹介するだけで、これだけの時間をとってしまいました。その普遍的な真の価値、中央や本山大寺院の蔵書だけでは見えてこない貴重な意義は、ただ単独でそのみを掘りこんでいくだけでは充分明らかにはなりません。どうしても別の地域の寺院蔵書、聖教典籍のアーカイブスとの比較参照が必要となります。それが、次にお話ししたい第二の探査と研究の可能性です。その点で最も適切かつ有効な比較の対象は、横浜にある金沢称名寺とその金沢文庫でしょう。ただし、称名寺は鎌倉幕府の中核、北条氏の一流で執権もつとめた金沢北条氏の菩提寺として、八宗兼学の大寺院でしたから、一地方の談義所から出発した真福寺とは格がまるで違います。それでも、鎌倉時代から諸宗・諸分野の聖教と典籍を神道書も含めて広汎に書写・収集した称名寺歴代住持（長老）とその許での学僧の営為の

所産は、驚くほどに似通っており、多くの共通点が見いだせます。いまは、その共通点のひとつである、中世仏教のニューウェーブであった禅のテキストについて、称名寺と真福寺が、ともに、後世に五山制が確立し、近世には臨済・曹洞の二宗となってその宗学を正統とすることによって忘れ去られしまった鎌倉時代の中世前期の禅の内実を、そのテキストそのものにおいてよく伝え、当時のそのままに禅の思想の動きをドキュメントしているアーカイブスであることが、それぞれ全体の中では僅かな量ではかありませんが、さきに述べた断簡の復原を含めその悉皆的調査によってあざやかにうかがいあがって参りました。その成果を、前述した両寺の禅籍を全て収録した『中世禅籍叢刊』全12巻、別巻論集1巻によって提示いたしましたので、参照いただければ幸いです。刊行したばかりのいまは、あまりにもコアな資料すぎて、誰も評価できない状態ですが、これから一〇年、二〇年、ひよっとすると五〇年経ちましたら、その真価を知ってくれる人が出現するかも知れません。そうした遙かな未来の読者までを想定して、あえてローカルな場から発信しているのです。

称名寺（金沢文庫）と真福寺（大須文庫）が、それぞれ、同じように初期の中世禅の他には殆ど残っていない貴重な聖教を（その中には、宋代の中国から海を渡ってもたらされたものも含まれます）伝えているのは、端的に言えば、両寺院がともに諸宗兼学の学問寺院として、一宗一派に限らず広く学び尋ねた、多くの教えを受け入れようとした好学の学僧が活動していたということであると思います。両寺の宗教テキストで共通するのは神道の書物についても同様ですが、そうした共通点と共に、明らかな差異もまた多く認められますので、その諸点を多面的に検討することで、中世寺院の宗教テキストの豊かな世界を、二重焦点の双眼鏡（顕微鏡？）をのぞくようにして、これからもなお探っていきたいと思っております。ちなみに、私は横浜の出身で、大学まではよく金沢

文庫に通っておりました。今は国宝となった称名寺聖教は、称名寺境内の一角に建っていた神奈川県立金沢文庫の収蔵庫に寄託されており、これを拜見することは若き日の私の憧れ、見果てぬ夢でありました。それが今は、大須文庫の聖教の調査研究から相対化しつつ比較研究するというプロジェクトを立ち上げて、金沢文庫と共同研究を行わせていただいているのですから、研究者の人生というものも本当に不思議な巡り合わせによって動かされ、支えられているのだとつい感慨を催してしまいました。

#### おわりに

まだお話ししたいことは、たくさんあるのですが、もう時間の余裕がなくなりました。最後に、深浦円覚寺の聖教という一地域の寺院の伝える書物群を、宗教テクストという視点に立って各地域に存在する宗教テクストのひとつとして、その相互の関係をとらえるなら、そこで時空を超えた豊かな未知の世界を発見する可能性を蔵する、まさしく文化遺産として地域社会同志が共有することのできる無尽蔵な資源であることを申し上げたいと思います。それぞれの地域に根ざした探求の取り組みを互いに連携させることによってこそ、その調査研究の成果は大きな輪となって未来の文化創成へとつながっていくことでしょう。その輪をつくりだす一環として、名古屋大学CHTと龍谷大学世界仏教文化研究センター、そして弘前大学地域未来創生センターの三者の連携が土台となり、一歩ずつ歩みを進めていくことができれば、これに勝る喜びはありません。

#### 〔参考文献〕

・国文学研究資料館編（阿部泰郎・山崎誠責任編集）『真福寺善本叢刊』第一期全十二巻（臨川書店、一九九八年～二〇〇〇年）、同第二期全

十二巻（臨川書店、二〇〇三年～二〇一一年）

・阿部泰郎・石井修道・末木文美士・高橋秀榮・道津綾乃共編『中世禅籍叢刊』全十二巻（臨川書店、二〇一三年～二〇一八年）、別巻『中世禅の新視角——『中世禅籍叢刊』が開く世界』（臨川書店、二〇一九年）

・名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター監修、阿部泰郎・伊藤聡・岡田荘司・大東敬明編『真福寺善本叢刊』第三期「神道篇」（臨川書店、二〇一九年～二〇二〇年）

・阿部泰郎監修、名古屋博物館編『大須観音 いま開かれる奇跡の文庫』（あるむ、二〇一二年）

・阿部泰郎編『愛知県史 別編 文化財4 典籍』（愛知県史編さん室、二〇一五年）

・阿部泰郎著『中世日本の宗教テクスト体系』（名古屋大学出版会、二〇一三年）

・頼瑜僧正七百年御遠忌三派合同記念論集委員会編『頼瑜僧正と新義真言教学の研究』「真福寺聖教の形成と頼瑜の著作」（大蔵出版、二〇〇二年）

・阿部泰郎「『魂の書物』の発見をめざして——寺院資料調査研究の場から」（『日本思想史学』四一、二〇〇九年）

・阿部泰郎「寺院資料調査研究と中世文学研究」（『中世文学』五六、二〇一一年）